



「感染症学」と「小児科学」が有機的に結びついた傑作

評者 | 森内浩幸 長崎大学教授・小児科学

齋藤昭彦氏は、わが国の小児感染症診療を牽引する存在である。米国で本格的に小児感染症の診療と研究のトレーニングを受け、帰国後は国立成育医療研究センターを経て、新潟大学に移ったあとも、国内の多くの小児科医に感染症教育を実践し育ててきた。その多くの仲間たち・弟子たちの協力のもとで、本書は編纂されている。

本書は、齋藤氏が薫陶を受けた青木眞氏の『レジデントのための感染症診療マニュアル』(2000、医学書院)の小児版というコンセプトで書かれたというが、単なるオマージュではなく「感染症学」と「小児科学」が有機的に結びついた傑作であり、今後わが国における小児感染症診療のバイブルとなるだろう。

齋藤氏が述べているように、小児には成人とは異なるさまざまな特色があり、それが感染症の分野でも単純に感染症学の小児版とするだけでは済まない難しさをもっている。本書では、総論のなかで小児という宿主の特殊性を十分に読者に理解できるように解説し、また、小児ならではの感染症各論も丁寧に展開している。

教科書、レファレンス、経験談…1冊3役の座右の書

また、感染症との鑑別が必要となる病態の解説も加えるとともに、症候学的アプローチ、感染臓器からのアプローチ、原因微生物からのアプローチと、多角的に小児感染症をとらえ、実際のプラクティスのなかでも使いやすく構成されている。エビデンスに基づいて書かれてあるけれども、ガイドラインのような味気なさはない。

本書は、「教科書」として腰を据えて読み込む部分、現場の「レファレンス」としてフットワークよく使い込む部分に加えて、指導医がコーヒープレイクの時に自分の経験談やフィロソフィーを話してくれるような「MEMO」が随所にちりばめられていて、読んでいて楽しいだけでなく、教科書的な内容からは学べないことをも教えてくれる。

すでに新型コロナウイルスのような新しい病原体についても記載されているが、感染症診療の進歩は日進月歩であるため、今後も本書は随時改訂されていくことと思われる。しかし長い年月が経っても、本書のコンセプトが生き続けるかぎり、Nelsonの小児科学やMandellの感染症学の教科書のような古典になっていることと確信する。そして、「小児感染症」という分野が、単純に小児科の中の感染症でもなく、感染症の小児領域というもののでもない、ユニークで重要な分野であることを示してくれることだろう。

G



レジデントのための 小児感染症 診療マニュアル

齋藤昭彦=編

定価：9,900円(本体9,000円+税10%)
A5判・884頁／医学書院／2022
[ISBN978-4-260-04294-9]